



※写真は京都紫野大徳寺塔頭の高桐院参道

## 瑞雲

昨日開業した北陸新幹線の停車駅に「飯山」とあった。行ったこともなければどんな町かも分からない。

しかし、この半世紀、私の頭の片隅に常に存在した処である。

「中世、日本の禅が滅亡の危機に瀕した時、最後まで禅の灯を灯し続けた処だ。そこで漉かれた紙で包んであげる」老僧はそう言っただけに記した。

「この紙は飯山山中零下十数度の雪中にて漉かれしもの也」

老僧の名は義山良忠 大徳寺の五百十世、処は京都紫野大徳寺塔頭の高桐院時は半世紀程前の師走二十九日頃の夕刻。日は傾きはじめ、快晴ではあったが深々とした寒さが周りを包み始めていた。当時私は二十才前。独りでよく散策し、疲れると近場の禅寺で休んだ。

高桐院には、細川忠興公とガラシヤ夫人の墓が有り、利休の天下一の石灯籠でも有名であるが、私は、加藤清正公が朝鮮王城の礎石を持ち帰り、巨大な蹲踞に造ったものに惹かれた。熊本の領国から、京・大阪・さらには江戸にまで片時も離さず幾十人もの兵に運ばせたものだ。それが高桐院にあった。

その年私は帰省することをやめ、師走の喧噪を楽しんだ後、いつものようにこの蹲踞の前に居た。小一時間も居たろうか、ふつと顔を向けると一人の老僧がお付きの者に手を取られ、私を見つめていた。

何故そこに居るか聞かれたので、この蹲踞が好きだからと応えた。どこから来たかと問うので、会津だと応えた。当時は福島などと言うより会津のほうが関西人にはわかりやすかった。すると彼は、私の師は天

田愚庵だ」という。一室に通され興の乗るまま話の相手をさせてもらった。八十過ぎの小柄な僧が、まさか大徳寺五百十世の義山良忠師とは田舎出の若造に分かるはずもなかった。二時間程居たろうか、別れ際に茶杓を二本出して、一本選びなさいと言われた。好きな方をくださるという。

片方はごく普通の竹で形は流れるように美しいもの、もう一本は斑入りの竹で中央に雲のような景色があり、正面と右側からの姿が良いが左側から見た角度に少々難のあるものだった。私は臆面もなく思った通りのことを言った。「斑入りの方が好きだが、左側の姿が気に入らない」。

すると老師は「じゃあそれにしなさい」という。「満は欠を招き、損は益を受くる。少々の欠点がある人にも物にも景色になって良いのだ」と。

筆をとって「銘瑞雲」と箱書きした。私が見えた斑を老師も瑞雲Ⅱめでたい雲と見立てたのだ。それを飯山山中零下十数度の雪中で漉かれた和紙で包んでくださった。

人間には、各々避けることのできない運命があると思う。

しかし、その運命に果敢に立ち向かい、しかるのち従容として受け入れる。これさえ出来るのなら、老師のいうように欠点はむしろ味のある景色となってその人間の価値を高めるに違いない。永い間私の周囲にいてくれた人達は、各々欠けたる処はあっても、それが致命的なものではなく、むしろ魅力となって輝いているように思えるのだが、どうだろうか…。

琶岬

平成二十七年三月十五日